

野沢温泉スキー合宿20周年を迎えて

記念行事実行委員長 4期 佐藤 秀紀

この度、金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会野沢温泉スキー合宿が20周年を迎えました。誠にご同慶の至りです。その記念行事の一環として記念文集を作成することになりました。

合宿参加者の延べ総数は同伴者も含めて324人、それぞれの年の参加合宿を通して多くの思い出が語られ、記録が残されることになると期待されます。そしてそれはまた、スキー合宿を通してではありませんが、金沢大学ワンダーフォーゲル部の何たるかを自ずと語ることになるのだと思われまふ。多感な学生時代に学都金沢に過ごし、ワンダーフォーゲル部に出会ってそこに一時期没頭し、人生の根っ子の一部を作った者たちが、それぞれ社会に出て多くの苦難試練を経た後、再度青春時代に同じクラブに所属していたというだけで和気あいあいと集まる。その会が20年も継続してきた。それだけで素晴らしいことではないでしょうか。もちろん、その背景には世話を続けてこられた幹事の方々のご尽力、その呼びかけに応じて毎回集まるスキー好きの面々があってこそ成り立つのでしょう。しかし、やはり、若き学生時代にワンゲルに所属することにより人生の根っこの一部を作った者に共通する心情・体験、いわゆる「気心」、がわかるという意識・雰囲気はその底辺に深く流れている事こそが継続の一番の理由ではないでしょうか。そんな意味で、スキー合宿は青春時代につくられた根っ子に咲いた花であり、20回記念はさらにその上に咲いた花、あるいは実であるともいえるのでしょう。喜ばしき限りです。

過日、ワンゲル創立35周年記念に製作された **Bergheim**（実行委員長北 正昭、編集責任者舟田節子）を見ていたら、クラブ創立当時の顧問教官鈴木広芳氏（工学部機械工学科教官、兼学生課長）の「部誌発刊に際して」という一文が目にとまりました。その中で、ワンゲルが、山岳部発足に際して山中心・技術中心の同部方針に同調できない一部部員が中心となり、自然に親しむ多様な活動を目指して発足した経緯を記しておられます。その後以下のことを述べておられます。『大学には現在25のスポーツ関連課外活動組織があるが、それらは高度の技術と普段の鍛錬を要し、選手中心の部と考えられぬこともない。私は以前から、このような部の発展強化に大学がもっと予算を増加すべきと主張してきたが、その反面、学生大衆を対象にして必ずしもエキスパートを要しない気軽に楽しめるスポーツ部が少しはあってもよいと考えていた。ワンダーフォーゲル部の誕生はこの意味で誠に歓迎すべきものであり、もろ手を挙げて賛成する、』云々。

私はこの一文を読んで以下のような思いに駆られました。ワンゲルにはここに示されたような、誤解を招くかもしれないが、ある種の「素人主義」があるのではないかと。技術はもちろんある場面では必要だが、それよりも「自然を楽しむ」、「仲間と楽しむ」ことが大切である。そして、そこには、「人とは何か」、「自然とはなにか」、「人は自然とどう接していくべきか」なども考えながら楽しみ、楽しみながら考える。そしてまた、技術のみにこだわらず、だれでも広く受け入れて、自然を通して、お互いに楽しんでいく、このような気風を我がワンダーフォーゲル部は培ってきたのではないだろうか。その現れの一つがこの野沢スキー合宿ではないだろうか、と。

今回の記念行事の趣旨の一つに、次の世代への参加アピールがあります。なかなか難しいところではありますが、ある年代に限られるOB（とはいえ現在の参加常連では0期から20期まで）のメンバーが20年にもわたって毎年全国から集まってスキー合宿を続けてきたこと、そしてその記録をこの節目の年に残すことは、若いOBや現役達にとっても一つの刺激になることは確かのように思います。世代が違うことはまたその文化が異なることでもあることから、この合宿に参加してこられるのも良いかもしれませんが、同じスタイルではなくともその世代にあうスタイルでこのような合宿が新しく起こるのもよいのではないのでしょうか。期待します。

最後になりましたが、この合宿の始まりは田村、辰野、舟田の諸氏らの話の中から生まれ、舟田氏がワンゲル40周年記念行事の一環として企画されたのが第1回とのこと。この20年間のスキー合宿を支えてこられた幹事の方々に深く感謝いたしますと共に、20周年記念行事にご尽力された実行委員の方々、特に全般にわたり実質的に絶大なご苦勞をされた保田氏および青柳氏に、この場を借りて深甚の感謝の意を表します。



1998年 第1回スキー合宿



2017年 第20回スキー合宿